

満州

憲兵から敗戦をきく

山形原 結城 吉之助

東満にいた私たち三千余人は牡丹江から最後の列車に乗ってハルビンに向かった。これは東満国境の日本男子はみんな召集令状をうけ、軍からハルビン南下を命令されたためである。家族とわかれ、日本軍の力を信頼し、決意もあらたに出発したのだった。

列車内の一夜があげ、大地からあかあかと朝日があがったが、みんな落ちつきのない放心状態だった。そうしているうちにはるか向こうのレール上で日の丸の旗をふっている数人の軍人の姿がみえた。列車はとまった。

なにごとだろうと団体の指揮者だった私は、十数人と降りて軍人とあった。

ところが、その軍人は直立不動の姿勢で「私どもは一面披（イーメンバ）憲兵分隊であります。電波を通じて終戦の詔勅がありました」と伝達した。みんなは驚き、うそだ、日本の憲兵までソ連のスパイになったか、殺してしまえ、といきりたった。列車から百人あまりの人が出てきて憲兵分隊になぐり込みをかけた。

憲兵は直ちに軽機二門をわれわれに向けた。

兵舎から隊長が一枚のタイプ用紙を持ってでてきた。それを読み終わり「このとおり内地から入手したほんとうのものだ。日本人同士が相うつことはやめてくれ、ハルビンにゆけばどうなるかわからないが、終戦の大御心を体して行動すべきだ、無念千万なのは一億の国民みな

同じだ。私も憲兵は奥地の日本人に終戦を伝える義務があり、この地にとどまるが、生きて日本に帰ることは望んでない」と声がふるえていた。悲痛な場だった。

憲兵とわかれて列車にもどり、終戦を伝えたところ、みんな発狂したように泣く、わめくの混乱だった、ある人は札箱をこわし、レールの上で満州国紙幣をやいてしまった。そのうち列車の中から一発の銃声がきこえてきた。不吉な予感がしたが、はたせるかな自殺だった。

やがて、列車は力なげに動いた。妻子と兄弟とわかれ、財産のすべてを放棄しての逃避行になってしまった。

終戦をきいてからの姿はみな一変し、たちまち団結は乱れ、自分さえ生きればよいという人間に落ちてしまった。列車の中で食べている子どもものにぎりめしを奪って自分の口に入れる大人がいた。

子どもは火がついたように泣き叫ぶ。子どもの親は鬼のような顔して、どろぼうどろぼうとのしる。途中から乗った開拓の農家の人らしかった。

ある駅には満人少年の搔払いがいたが、満州現地人から飲料水運んでくれたり、卵をくれたりもした。もし

て日本は負けたが、十年後にはまた満州にくるのだからと親切にいきかせる満州老人もいた。

牡丹江からハルビンまでの鉄道沿線は、山あり、谷あり、平原ありのすばらしい景勝の地だが、ソ連の空爆をくぐり抜け、敗戦を知らされた目にはなんの感動もなく、心はどん底にたたきめされていた。

翌日の午後、ハルビン駅についた。大勢のソ連兵がまぢかまえていた。

数千の日本兵はソ連兵に引きずられ、ハルビン郊外の捕虜収容所に投げこまれた。収容所とは原野に鉄条網をはりめぐらした青てんじょうの牧草にめぐらすところだった。

鼓膜が破れて

北海道 高橋 才吉

昭和十年頃小樽駅員として働いていました。その当時品川義介先生が琴似に白雲山荘として全国より青年を盛